

学ぶ側としての方法論

・ ・ 視 点



企業か学校かに関わらず、教育というプロセスを成立させることにおいて「教える」と「学ぶ」ことはどちらも重要である。教える側としては、講義の構成を考えて、できるだけ良いテキストやスライドを作る努力をしたり、動画等の教材を準備したりと、それぞれ工夫を凝らして頑張る人も多い。世の中には「教え方」や「伝え方」についての情報も多く、教える側はそういった情報を活用して準備をすることで、結果的に対象についてもよく学ぶことになる。教えることが自分の勉強になる、というのはよく言われることである。

一方、「学ぶ側」については、教える側に比べると、方法論としての頑張りが分かりにくいように思う。「講義中は寝ないようにする」、「毎日～時間勉強する」「～の数式を暗記する」…。どれも本人の努力次第といったイメージで、さらには少し苦しそうだ。近年では、さまざまな分野で多くの入門書が出版されているだけでなく、web上には優れた解説動画があり、独学をするための教材は豊富である。しかしながら、誰かに教わるにしても、書籍等で独学するにしても、上手く学び続けられる人と、そうでない人がいるのが現実だと思う。

会社に入ってはじめて品質工学に触れた技術者でも、その後、品質工学をどんどん活用するようになる人もいれば、全く無かったことにしてしまう人もいる。上司や環境が変わったということもあるかとは思いますが、学びにおける不具合があるとすれば、これを改善することで、品質工学の普及と発展にも寄与することができるのではないかと思います。特に、品質工学は実践することが大事だといわれる。学びを実践につなげ、その実践を新たな学びにつなげるためには、学ぶ側としてどのような準備や振る舞いをするのが良いのだろうか。また、教える側としては、

どのように導いていけば良いのだろうか。今回は、学ぶ側のあり方にも着目した教育について、議論できればと思う。

—「何を知らないか」を知らないことには、学ぶことは容易ではない。また、知らないことであっても、興味が無いことについては学ぶことは容易ではない。「学びたい理由」が重要なのだと思う。

—「学ばなければならない理由」はあっても「学びたい理由」が希薄であれば、効率は上がらない。「学ぶ」ではなく、「学ばされる」あるいは「教えられる」という意識であれば、講義が終わって上司や環境が変われば無かったことになるのは当然かもしれない。

—品質工学では事例が重視されているが、必ずしもその一般化が進んでいないこともある。そのため、学び、実践するためには事例のデータが必要になる。「学ばされる」側であった時には周囲から事例データも提供されることが多いが、自分で「学ぶ」ために事例データを入手しようとするとは容易ではないことも多い。

—ただ、与えられたデータを提供してもらった段階から一歩進んで、自分で事例データを作って実践するようになることで、より理解も深まり、次の学びにつながっていく好循環が生まれると思う。

—それでも、学ぶ前に学んだ後の世界を想像することは難しい。

—最近アクティブラーニングという言葉がある。教員からの一方的な講義ではなく、生徒や学生が自ら興味を持って能動的に学ぶような授業を作っていくということで、グループワークなどの活用事例が多い。

—興味があっても理解できないこと、覚えられない